慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	重陽の詩歌：詩語、歌語と行事をめぐって
Sub Title	A study about the poetry of “Chong-Yong”
Author	許, 曼麗(Hsu, ManLi)
Publisher	慶應義塾大学日吉紀要刊行委員会
Publication year	2005
Jtitle	慶應義塾大学日吉紀要. 言語・ 文化・ コミュニケーション No.35 (2005.) ,p.1(176)- 28(149)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN10032394-20050002-0176

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

重陽の詩歌

――詩語、歌語と行事をめぐって――

許　曼　麗

前　言

「重陽」という言葉は、親しみを感じさせる響きを持っている。

九月九日憶山東兄弟（時年十七）　王維

獨在異鄉為異客　独り異郷に在って異客と為り
毎逢佳節倍思親　佳節に逢う毎に倍(ま)すます親を思う
遙知兄弟登高處　遙かに知る　兄弟高きに登る処
遍插茱萸少一人　遍(あまね)く茱萸(しゅゆ)を挿して一人を少(か)くを

この詩は中国語圏において、教養人のみならず、一般の民間人も諳んじるほど有名なものである。重陽と聞けば、この詩に詠まれている茱萸(しゅゆ)、登高、そして菊花、菊酒などを、すぐ頭に思い浮かべるほど、何れも馴染み深い言葉である。しかし、少し深く考えると、馴染み深いのは言葉だけであって、行事との関わり方から見ると、実生活の中ではむしろ馴染みの薄い節句と言える。重陽の行事は、端午のそ

れと違って、血が騒ぐようなわくわく感はない。また、中秋のように、団らんに集う家族への帰属感もない。地方によって、この日は、「祭祖」の日で、亡くなった先祖の個々の命日には祭祀をせず、まとめてこの日に先祖を祭祀する。また、この日に、「放風箏」、つまり凧をあげる地方もある。現代においては、九月九日は「敬老の日」と定められている。この日になると、敬老に関する活動は方々で行われるし、健康のために「登高」を呼びかけたりもする。しかし、端午、中秋のように、毎年盛大に執り行われることはない。菊酒を飲み、茱萸嚢を体に結び付けるようなことは次第になくなり、菊花を目にしても、特に重陽との結びつきを意識することはなくなった。しかし、重陽は歴史の古い節句である。漢の時代にすでに成立し、魏晋南北朝以降、とりわけ「王公権貴」の間で盛んに行われるようになった。行事を繰り返す度に、たくさんの詩作が成されたのである。類書で歳時詩を見てみると、唐代末までの詩作が極めて少ない端午詩[1]に比べて、重陽詩はかなりの数にのぼる。明の張之象編纂の『古詩類苑』には十九首（端午詩は〇首）、『唐詩類苑』には百九十五首（端午詩は十四首）を数える。これらの詩作の中で、冒頭の王維の詩がそうであるように、名作とされるものがよく文学の基本書に登場するのである。賞菊、挿茱萸、登高などに抱く親しみは、教科書を通して、知識によって植え付けられた、つまり、習得した感情によるものであると言える。

一方、日本の年中行事を見てみると、どこか、先に述べたことに類似した現象が見受けられる。「重陽」という言葉を知らない人はあまりいないが、どのような行事が執り行われてきたのかを知る人は、決して多くはない。しかし、平安時代には、重陽の宴が催された記録が多く残されている。「重陽」に抱く親近感は、資料が多い故にもたらしたものであろうか。よく知っている節句であるのに、実生活にはほとんど関わりがない。何故このような断層が出来たのか。どのような要因が背後にあったのか。これらの要因を考えるに、試みに、詩歌を中心に考察してみた。本稿は、重陽詩の代表的な詩語の考察を通して、重陽の風習の変遷を検討し、時代が下がると共に、人々の受け入れの違いを検証し、前述した断層の理由を考えてみたい。そして、中国文化の洗礼を受けた古代日本人の詠む詩歌が、どれほど漢籍の影響を受けたのかを考察し、詩語と歌語との関わりを探ってみたい。以下、まず、諸書の重陽についての記述から我々が慣れ親しんでいる詩語が、どのような形で登場したかを把握した上で、それぞれの詩語がどう詠まれているのか、そして和歌ではどう歌われたのか、日本漢詩も視野に入れ、詩語と歌語とを比較しつつ、日本にも同じように生じている断層の要因を探っていくこととする。

一　行事と詩語

まず、重陽の由来を見てみよう。すでに多くの歳時に関する論著に指摘されているように、重陽の行事について、その起源は前漢の時代まで遡ることが出来る。これも諸書に引かれているが、晋の葛洪の編[2]とされる『西京雑記』に次なる記述がある。

（前略）「九月九日佩茱萸、食蓬餌、飲菊花酒令人長壽。菊花舒時并採莖葉、雜黍米釀之、至來年九月九日始熟就、飲焉。故謂之菊花酒。」（下略）

（九月九日には茱萸を佩び、蓬餌を食し、菊花酒を飲めば、人を長寿にさせる。菊の花びらが開く時、花びらと茎、葉を採り、黍米を雑ぜて釀す。翌年の九月九日漸く熟し、できあがったものを飲む。故に菊花酒という。）　※訳は大意である。以下同。

これは、漢武帝の愛妾戚夫人に仕えた女性賈佩蘭が宮中にいた時の思い出として、記されたものである。登高、菊花については言及していないが、重陽の風物である、茱萸、菊酒などは、後によく詩の素材として使われる。

登高に関しては、『荆楚歳時記』に「九月九日四民並藉野飲宴」とあるところ、杜公瞻が注して曰く、

九月九日宴會未知起於何代。然自漢至宋未改。今北人亦重此節。佩茱萸、食餌、飲菊花酒、云令人長壽。近代皆設宴於臺榭。又續齊諧記云（下略）

（九月九日の宴会はいつの代から始まったのかは知らない。しかし、漢から宋に至って、この習慣は変わらずにある。いま、北の人たちもこの節を重んじている。茱萸を佩び、餌を食し、菊花酒を飲む。人を長壽にさせるという。近代では、皆臺榭で宴を設ける。また續齊諧記云々。）　※臺榭は高台に建つ木屋のこと。

その「又續齊諧記云」以下は次のような記述になっている。

汝南桓景隨費長房遊學累年。長房謂曰、九月九日汝家中當有災、宜急去、令家人各作絳囊、盛茱萸以繫臂、登高飲菊花酒、此禍可除。景如言齊家登山、夕還、見雞犬牛羊一時暴死。長房聞之曰、此可代也。今世人九日登高飲酒、婦人帶茱萸囊、蓋始於此。

（見『續齊諧記』）

これは古い時代から、人々が喜んで口にする物語である。すなわち、東漢時代の桓景の道術の師である費長房が、桓景に対して、九月九日、家中に災いがある故、家に戻り家人に茱萸を詰めた彩った袋を臂に結び高いところに登って菊花酒を飲むようにさせなさいと指示したところ、桓景はそれに従い、難を逃れたという物語である。附会の説と言われつつも、長い歴史を持つ「人尽皆知」の物語である。右記の傍点の箇所は、「九日登高飲酒、女性が茱萸袋を佩びる習慣はこれより始まる」としているが、実際、「佩茱萸」は先に挙げた『西京雑記』や、『荆楚歳時記』によると、前漢時代にはすでにそのような習わしがあったことが分かる。「登高」そのものは、漢よりさらに古い時代から始まったのであるが、九月九日の行事である「登高」とは異なる意味を持っている。これについては、後に詳しく述べるが、「茱萸繫臂、登高飲菊酒」つまり、難を避け、邪を払い除け、長寿を願うなど一連の行事は、漢の時代にすでにあり、しかも頻繁に行われたと考えられる。元々秋は収穫の季節である。豊作を祝い、農産物の新嘗めをする。また、季節の変わり目であるため、体調が崩れやすく、病気になりがちなので、邪を払い、無病を祈る行事も行われた。前述した『西京雑記』と「桓景登高」の話はいずれもこのような行事から敷衍されたものと考えられる。辟邪の意味合いを強く帯びている。

では、「菊花」が重陽と関わったのはいつ頃だろう。魏の文帝曹丕が鍾繇に送る書にこのように言っている。

歳往月來、忽復九月九日。九為陽數、而日月並應。俗嘉其名、以為宜於長久、故以享宴高會。是月律中無射、言群木庶草、無有射而生。至於芳菊、紛然獨榮。非夫含乾坤之純和、體芬芳之淑氣、孰能如此。故屈平悲冉冉之將老、思食秋菊之落英。輔體延年、

莫斯之貴。謹奉一束、以助彭祖之術。

（歳往き月来たり、忽として再び九月九日にあう。九は陽数であり、しかも日月並びに相応じている。俗、その名を嘉として、以て長久に宜しとする。故に高処での宴会を享する。この月は十二律の中では「無射」と言って、陰の気が強くなり、陽の気は無くなるぐらい衰え、草木も凋落に向かうところ、菊だけ香りを放ち、ひとり栄えをみせる。天地の純和なる気を含まずして、芬芳の淑気を体得しないではこのようになるはずがない。故に、屈原は老いつつあることを悲しみ、秋菊の花びらを食することを思った。体を滋し、寿命を延ばすにこれ（菊）より貴いものはない。謹んで一束を奉り、彭祖（延年）の術を助けようとする。）

重陽という表現は文帝のこの書によるとされる。伝説では、彭祖は八百歳まで生きた人である。その長寿の源は菊と深い関係がある故、菊は古くから長寿の象徴になっている。それ故、屈原は「朝飲木蘭之墜露、夕餐秋菊之落英」と楚辞に詠んでいる。これらの典故を踏まえて、鍾繇に菊花を差し上げると言っている。菊酒を飲むのではなく、菊花を食べるのである。「餐菊」という語の由来である。また、世には、菊水[3]や菊潭など菊に因む場所があり、その畔に生活していた部落の民はことごとく長寿であることの記述は昔から少なからずあった。

九日得新字　　孟浩然

九日未成旬、重陽即此晨。登高尋故事、載酒訪幽人。
落帽恣歡飲、授衣同試新。茱萸正可佩、折取寄情親。

（九日は旬にはならないが、重陽はまさにこの九の日である。高きに登り、古の物語を尋ね、酒を載せて隠居人を訪れる。歓しい飲宴に（気を）任せ、帽子が落ちるのも気がつかず孟嘉の逸話もこの日の出来事だったな。冬のために作った新しい服を試すのもこの季節なのだ。茱萸は佩びるにほどよくできているので、折って家族の思いを寄せて送ろう。）

登高、茱萸それに陶淵明にまつわる酒と菊が詠まれている。この他、「落帽」という表現がある。重陽詩には「落帽」という詩語がしばしば登場する。晉の孟嘉[4]の文才についてのエピソードが元になっている。九月九日にまつわる故事として、最も時代の古いものである。しかし、この「落帽」は重陽詩の行事ではないので、本論では特に取り上げないことにする。

では、日本は何時から重陽の行事を始めたのか。山中裕氏が著書『平安朝の年中行事』に収めている「重陽宴・菊花宴[5]」には、詳しい考察が述べられている。詳細はその論に委ねるが、要点を簡単に記しておく。即ち、日本の重陽の宴は、その起源自体は明確ではない。氏は、『日本書紀[6]』『政事要略[7]』の記録を引いて、天武天皇の御世で、旧宮安殿の庭で催された宴は重陽や菊花宴ではないにしても、重陽節に準ずる宴であったと見ている。その後、淳和天皇の天長八年に正式に重陽節の記述があるまで、九日はあくまでも宴会であって、節会ではないとしている。この重陽節の行事は平安朝初期から中期にかけて、盛んに行われたと述べている。この時に諸書に書かれた重陽にまつわる伝説は、中国で言い伝えられた、漢代桓景の物語や、菊の霊力によって八百余歳にして、童子の顔をしている彭祖の伝説などであった。行事は、中国のそれを継承しながら、「菊の着せ綿」を編み出し、重陽の行事ではないが、日本独自の「菊合」を考え出している。これについて、次節に述べる。

二　菊と菊花酒

では、菊から見てみよう。

おそらく菊は中国文学史上最も文人に愛された屈指の花と言えよう。菊に関する記載も古い時代の書物に散見される。『藝文類聚』などの類書を開けば、記録の数は実に夥しい。不老不死への追求の観点から、菊は人を長寿にする妙用があるので、大事な存在であることは言うまでもないが、詩人たちはむしろ、菊は冬を迎える前に、すべての花が散り尽くしたところ、その年最後の花として、ひとり凛然と咲き誇る、その孤高の姿が詩人の心を捉えたのではないか。隠逸の花とも言われている。何よりも、最も中国の文人に愛された詩人である陶淵明が菊花に心酔し、よく菊を詩に詠んでいる。

九日作并序　　陶潛

余閒居愛重九之名秋菊盈園而持醪靡由空服九華寄懷於言

世短意常多、斯人樂久生。日月依辰至、舉俗愛其名。露凄暄風息、氣澈天象明。

往鸞無遺影、來雁有餘聲。酒能祛百慮、菊為制頹齡。如何蓬廬士、空視時運傾。（下略）

（余、閑居して、重九の名を愛す。秋菊は園に盈ちるほど咲いているのに、しかし（手にするはずの）酒はない。空しく（この）九日咲く（菊の）華を服して、思いを言葉に寄す。）

※大意は序のみ。

序のほかに、詩中には「酒は能く百の慮いを払い、菊は頽れていく齢を制するためにある」と詠んでいる。陶潛が重九、菊、酒に対する思いが十分に読みとれる。詩人はまた「飲酒二十首」の中、「采菊東籬下、悠然見南山」という千古の名詩を残している。この句以降、「東籬」もまた菊の代名詞になり、後世の詩作にしばしば登場するのである。

このほか、陶淵明にまつわる菊と酒の話もまた後世の重陽詩の典故の一つとして継承されていくのである。『続晋陽秋』にこのような話が載っている。

陶潛九月九日無酒、宅東籬下菊聚中、摘盈把、坐其側。未幾、望見白衣人至、乃王弘送酒也。即便就醉而後歸。

（陶淵明、九月九日に（酒が飲みたいのに）酒がなく、家の東側の籬にある菊畑の中から菊花を折り、手に一杯になるぐらい抱え、菊花のそばにぼうと座っていた。しばらくして、白い服を着た人が現れ、王弘が酒を送ってきたのだ。すぐに飲み始めて、酔っぱらってから、のち家に帰った。）

これがのち、後世の詩人がよく使う「送酒」「白衣人」などの重陽の詩語の濫觴となる。

九日　　王勃

九日重陽節、開門有菊花。不知来送酒、若箇是陶家。

（九日は重陽の節句なり。門を開ければ、菊の花がいっぱい咲いている。酒を届けてきたのは良いけれど、（花に埋まって）陶隠居の家は何処かは知らない。）

李白も「因招白衣人、笑酌黄花菊[8]」という句を詩に詠んでいる。この他、「感遇四首」の中に、次のように詠んでいる。

可歎東籬菊、莖疏葉且微。雖言異蘭蕙、亦自有芳菲。
未泛盈樽酒、徒霑清露輝。當榮君不採、飄落欲何依。

（東の籬（まがき）に咲いている菊は、茎も疎らで葉も弱々しく、まことに嘆くべき哀れな有り様。蘭や蕙のような香草と異なると謂えども、やはり、菊は香りを持っている花を咲かせるものなのだ。まだ盃に盈した酒に浮かべることなく、ただただ露の清らかな光りに潤（うるお）されているのみである。君がいま盛んに花を咲かしているこの菊を折り取らないならば、やがて、散り落ち、風に吹かれて、何処へ行ってしまうものよ。）

且酌東籬菊、聊祛南國愁。　　（杜甫「九日登梓州城[9]」）
惆悵東籬不同醉、陶家明日是重陽。　　（白居易「九月八日酬皇甫十見贈[10]」）

詩人達は、ことごとく菊に愛着を抱く陶淵明にまつわる菊の典故を自分の詩に取り込んでいる。元稹は「菊花」をこのように詠んでいる。

秋叢繞舍似陶家、遍繞邊日漸斜。不是花中偏愛菊、此花開盡更無花。

（秋菊がいっぱいに咲き、家のまわりを囲んでいるところは陶潜の家にそっくりだ。日が暮れていく中、この遍く籬を繞らせている菊花の見事なことよ。花の中で菊を偏愛しているのではない。この花が咲ききったら、（今年は）もう花を見ることが出来ないからだ。

この詩にも、陶淵明への傾斜が明らかである。因みに、元稹のこの詩を、白居易は更に詩に詠んでいる。

禁中九日對菊花酒憶元九　　白居易

賜酒盈杯誰共持、宮花滿把獨相思。相思只傍花邊立、盡日吟君詠菊詩。

（天子より賜った酒が満々に注がれた盃を誰と一緒に持つのだろうか。宮中に咲く（菊の）花を手に一杯にしているのだが、一人で君のことを思っている。深い思いにかられ、只花のそばに佇んでいて、一日中、君が詠んだ菊花詩を口ずさむばかりだった。）

ところが、上記元稹の「菊花」もそうであるように、詩人達は九日に限ってのみ、菊を詠むのではない。前掲『唐詩類苑』には四十六首の菊の詩がある。その中に重陽の菊と詠んだのは、十首にも満たない。菊の記録は早くも『爾雅』釋草篇に出ている。『禮記』の月令にも「季秋之月、鞠有黄華」とある。鞠は菊である。菊は中国原産の植物で、唐まで種類が少なく、ほとんどが黄色い花を咲かせるものだった。そのため、黄華もまた菊の代名詞としてしばしば使われる。ここで注目したいのは「季秋」という表現である。つまり、菊の咲き頃は重陽の節句のある九月ではなく、晩秋の十月である。菊花酒[11]は前の年に醸造しておいて、翌年の重陽の日にそれを飲む。しかし、重陽に咲く菊は、種類と数はそれほど多くはないと思われる。白居易は「和錢員外早冬玩禁中新菊」[12]という詩を詠んでいる。早冬に咲く菊もあるのだ。九月の重陽に詠まれた菊の全てが実際目にした菊を詩に詠んだのか、それとも前人の詩作にある菊をただ継承したのか、実のところは不明である。もっとも、唐に入ると、菊の栽培が段々と盛んになり、新種の開発を競うようになってくるので、菊事情も大分異なってくると考えられる。宋代以降、『菊譜』[13]と呼ばれる著が数種類出来るぐらい、菊に対する関心が益々高くなっていく。

蘇東坡が、「江月五首」[14]の序に、

嶺南気候不常、吾嘗言、「菊花開時即重陽、涼天佳月即中秋、不須以日月為断也。」
（嶺南地方は気候が不順であるので、私は前からこのように言っている。「菊が花を咲くとき即ち重陽である。気候が涼しく、月が佳ければ即ち中秋である。暦で判断する必要はない。」）

と言っている。「和己酉歳九月九日」という詩にも、

今日我重九、誰謂秋冬交。黄花與我期、草中實後凋。（下略）
（今日私は重九の節句を祝うのだ、もう冬にさしかかっているというのにと誰に言われようと。菊花が咲く頃は私に重陽の期を与えてくれるのだ、草花の中、実に最後になって凋落するこの黄色い花が。）

菊詩の多くが重陽詩ではないところは、やはり、菊の咲き頃と重陽の日とが、ずれていることに帰因すると言わざるを得ない。

では、日本では菊はどう歌われたのか。菊は伝来のものである。その伝来は何時なのか。一般的には[15]、奈良時代と言われているが、仁徳天皇の代に百済より渡来したとの説もある。しかし、万葉集には菊は全く登場しない。とすれば、この時代の歌人は菊を見ていないのではないかとも考えられる。ところが、七五一年に編纂された『懐風藻』には、六首の菊詩がある。

秋夜宴山池　　境部王

対峰傾菊酒　　峰に対して菊酒を傾け
臨水拍桐琴　　水に臨んで桐琴を拍つ
忘帰待明月　　帰るを待つ明月
何憂夜漏深　　何ぞ憂へむ　夜漏の深きを

菊酒は中国伝来の重陽にまつわる風習を踏まえていることは言うまでもない。この他、

菊風披夕霧、桂月照蘭洲　（吉智首「七夕」）
水底遊鱗戯、巖前菊気芳　（田中浄足「晩秋於長屋王宅宴」）

などの表現が見受けられる。これは、漢籍、ことに『藝文類聚』による知識を頼りに詠んだものと考えられる。吉智首の「七夕」でも分かるように、実際、菊を見たり、菊酒を飲んだりはしなかったのであろう。七夕の季節は菊の咲く季節ではないからである。やがて、八世紀末に菊が伝来し、すぐさま王朝人を魅了して、天皇自ら重陽の宴を催しては、菊を詠んだ。『凌雲集』、『文華秀麗集』、『經國集』などの漢詩集[16]に見られる漢詩だけではなく、和歌にも多く詠誦されるようになった。古今和歌集を始め、八代集に限って見るだけでも六十五首はある。

世中のはかなきことを思ひけるをりにきくの花を見てよみける　つらゆき

二七六　秋の菊にほふかぎりはかざしてむ花よりさきとしらぬわが身を　（『古今和歌集』）

（この秋の菊、香りがついている限りは頭にかざしておこう。花より先のことなんぞ分からないこの我が身を。）

重陽の楽しい宴会の歌ではなく、無常観が漂っている。紀貫之の歌同様、これら秋歌の巻に納められている菊の歌は、ほとんど重陽という節句の為に詠んだものではない。重陽と明記した歌はむしろ珍しい。勅撰和歌集の二十一代集に二百六十四首の菊の歌がある中、「重陽」、「九月九日」と記してあるのは、それぞれ五首に過ぎない。無論、重陽の日の行事を歌ったわけではないにしても、歌人たちが、作歌の際、伝来の重陽の典故を十分意識していたことには疑いを挟む余地はない。

きくの花のもとにて、人をまてるかたをよめる　友則

二七四　はなみつつひとまつときはしろたへのそでかとのみぞあやまたれける　（『古今和歌集』）

（花をただただ見つめながら人を待っていたら、白い袖（が現れた）かなとばかり思った。ただ（白い菊を）見まちがえられたことだ。）

この白い袖は陶淵明に因む「白衣人」と解釈[17]されている。

となりにすみ侍りける時、九月八日伊勢が家の菊にわたをきせにつかはしたりければ、又のあしたをりてかへすとて

伊勢

三九四　かずしらず君がよはひをのばへつつなだたるやどのつゆとならなん　（『後撰和歌集』）

（（我が家の菊の着せ綿においた露を差し上げましょう。）この露が、数も分からないほど、たくさんあなたさまのお齢をお延ばしつつ、（あなたの）評判の高いお庭の露になってほしいと思います。）

返し　藤原雅正

三九五　露だにも名だたるやどの菊ならば花のあるじやいくよなるらん

（露でさえも延命で名高いあなたのお宅の菊でしたら、その花のご主人のあなた、ご寿命は幾年になりましょうか。きっと、菊の齢以上に長らえられるに違いないでしょう。）

菊に綿を着せるとは、九月八日に、菊の上に綿を被せ、翌日の九日までに露を含ませておく。その綿で体を拭くことによって、老いを拭き取り、若返りを祈念したものである。伊勢が、歌を添えてそれを藤原雅正に差し上げたところ、雅正が菊を折って、歌に添えて返した

やりとりであった。清少納言の「枕草子」第八段にも菊の着せ綿について次のように触れている。

（前略）九月九日は、暁がたより雨すこし降りて、菊の露もこちたく、覆ひたる綿などもいたく濡れ、移しの香も持てはやされて。（下略）

（九月九日は、夜明け方から雨が少し降って、菊に露がたっぷりとついて、菊に着せた綿などもひどく濡れて、そのため、花の移り香も一段と際立つ。）

この習わしは、日本が独自に編み出したもので、中国本土にはなかったものである。更に、菊合の歌会を催すようになる。上記古今和歌集の二七四番歌は「寛平御時菊合」[18]最後の歌である。二七四番歌以外にも、この菊歌合の歌が三首収録されている。菊と長寿の思想を表すものが多い。寛平以降、菊合は数多く催されるが、特に重陽との関わりは見受けられないのである。開催日を見ると分かるように、大方十月の中旬に行われたのである。例えば、延喜十三年（九一三年）醍醐天皇開催の内裏菊合は十月十三日、長元五年（一〇三二年）の上東門院菊合は十月十八日であった。日本に移植してきた菊も、開花の季節は重陽節とはひと月ほどずれているのである。

三　茱萸（しゅゆ）

九日曲江　　杜甫

綴席茱萸好、浮舟菡萏衰。季秋時欲半、九日意兼悲。
江水清源曲、荊門此路疑。晩來高興盡、搖蕩菊花期。

（頭に挿すために用意されたきれいな茱萸は、宴の席を綴り、舟に浮かべれば、鮮やかな（茱萸）の色に照らされると、蓮の花が衰えてみえる。晩秋も九日になると、はや月の半ばにさしかかり、九（久）の重なる日に心は何故か悲しみを兼ねてしまう。清らかな

源である大江の水が、ここで曲っており、この道は果たして荊門に行くのか。時間が遅くなるに連れ、高ぶった楽しみも尽き果てて
しまうとともに、心も時間の移りゆく中揺れ動いていくものなのだ。）

「楽極生悲」ではなく、宴会の当初から悲哀の意を心に抱いていた。「九日藍田崔氏莊」[19]の末二句に、杜甫は「明年此會知誰健、醉把茱萸子細看」と詠んでいる。「来年の重陽の会で、今この中の参加者のどなたが健在でいるのだろうか、酒に酔いながら、（焦点の合わない目で）じっと茱萸を見つめつつ思うに」と。重陽の日に、茱萸を戴き、辟邪延壽を期したはずなのに、杜甫の詩は悲哀の奈落に落ち込んでいる。茱萸の厄払いの効はまるで効かないのである。「應制」でない詩作にはこのようなトーンが多い。

茱萸は重陽節の風物として、欠かせないものである。何時から、茱萸が辟邪の植物として使われ始めたのかは定かではない。『西京雑記』では「佩茱萸、食蓬餌、飲菊花酒、令人長壽」とだけ記されている。晉の孫楚[20]の「茱萸賦」によると、

有茱萸之嘉木、植茅茨之前。（中略）攀紫房於纖柯、綴朱實之酷烈。應神農之本草、療生民之疹疾。
（茱萸の良い木があり、茅葺きの家の前に植わっている。（中略）紫の房が刺のある幹をめぐらせ、香気の強い赤い実を綴らせている。
神農氏が本草経に記してある薬効に応じ、民衆の疹疾を療す。）

とある。すでに『神農本草経』にその薬効が記されていると分かる。また、『芸文類聚』九月九日の記述に、次のように述べている。『風土記』曰、「九月九日、律中無射而數九。俗尚此月。折茱萸房以插頭。言辟除悪氣而禦初寒。」又曰、「茱萸、九月九日熟、色赤可採時也。」『本草綱目』に、「呉茱萸[21]」について、李時珍がその性質「気味辛温有小毒」と言っている。さらに、集解の中、時珍が『淮南萬畢術』を引いて曰く、

井上宜種茱萸、葉落井中、人飲其水、無瘟疫。懸其子於屋、辟鬼魅。

（井戸の上には茱萸を植えると良い。葉が井戸の中に落ち、人々がその水を飲めば、病気（瘟疫）にかからない。その種を家に懸ければ、鬼魅を避けることが出来る。）

つまり、茱萸は赤い実を結ぶ、香りの強い植物である。香りの強いものは、古くから邪悪を払い除ける力を持っているとされている。七月八月頃に結んだ実を採り、それを涼しいところで乾し、出来たものを袋に詰め、香嚢のように体につける。これによって、邪悪を払い除けることが出来るという。重陽詩に登場する茱萸はそのまま辟邪の思想を継承している。

秋歌二首之一

辟悪茱萸嚢、延年菊花酒。與子結綢繆、丹心此何有。

（辟邪の効用を持つ茱萸嚢、そして延年の妙用のある菊花酒、君にお近寄りになりたいための印として、これを君にさし上げよう。これ以上の真心はほかにないでしょうよ。）

本稿冒頭王維の詩に出る「茱萸」もまさに、邪を払うために頭に挿すのである。『西京雑記』と『続斉諧記』では、茱萸又は茱萸嚢を佩びるが、唐詩になると、ほとんどが王維と同様に、茱萸を頭に挿すことになる。行事として、『風土記』の記述である「折茱萸房以插頭」の方が親しまれたようだ。

茱萸插鬢花宜壽　（王昌齡「九日登高[22]」）

髮稀那更插茱萸　（耿湋「九日」）

學他年少插茱萸　（朱放「九日與楊凝崔淑期登江上山會有故不得往因贈之」）

強插茱萸隨衆人　　（楊衡「九日」）

のように、多くの詩人に詠まれている。

しかし、詩語「茱萸」が登場するたびに、辟邪だけを意味するではない。孫楚の「茱萸賦」を遡って約五十年、曹子建の浮萍篇に「茱萸自有芳不若桂與蘭」とある。茱萸の香りを詠んでいる。その後、南北朝時代の詩人が詠んだ茱萸も、辟邪と無関係である。中には、錦の一種「茱萸錦」と「茱萸溝」、「茱萸嶺」などのような地名がしばしば登場する。また、楽府雑曲歌辞名に「茱萸女」というのがある。

雜曲歌辭　茱萸女（萬楚）

山陰柳家女、九日采茱萸。復得東鄰伴、雙為陌上姝。插花向高髻、結子置長裾。

（中略）俠客邀羅袖、行人挑短書。蛾眉自有主、年少莫踟躕。

（山の北側に柳の植わっている家の娘、九日に茱萸を採りに出かける。さらに東の隣の娘も伴になり、二人して陌（あぜみち）の上の美女になる。（採った茱萸の）花を高く結った髪に挿し、結んだ子（み）を長いスカートに置く。（中略）俠客はうすぎぬのおくりものをしたり、道行きの人も文を出して誘ったりする（ぐらい、みなその美しい姿に心を奪われる）。しかし、この美人たちは自ずと考えを持っているので、若者たちよ、（周りを）徘徊することをしないで下さい。）

「采桑」と同じように「采茱萸」もあったろうか。桑と同様に、茱萸の採収も大事な農事であり、女性がその任を担ったであろう。「采桑女」もしばしば歌われる[23]ように、「茱萸女」という歌辞名の由来にはそのような背景があったのではないかと思われる。唐代になると、旧暦九月九日に市中の女が茱萸をとって客に酒を勧める風習があるという。次の詩にはその一斑が窺える。

九日宴　　張謂

秋葉風吹黄颯颯、晴雲日照白鱗鱗。歸來得問茱萸女、今日登高醉幾人。

（秋風が木の葉も黄菊もさわさわ音がするよう吹き通し、日に照らして、晴れやかな雲がいっそう麗しくみえる（今日この重陽の日を）。宴会の帰りには茱萸女に聞かなくては、今日高きに登ったお客さんを何人酔わしたのか、と。）

茱萸という詩語が重陽詩において、最も大事な詩語であることは間違いない。

さて、視点を日本に移そう。現代の日本語では茱萸のこと「ぐみ」と呼んでいる。しかし、これは間違いで、本当の茱萸に該当する植物は「かわはじかみ」という。漢字では、「川薑」と当てたりする。『和名抄』では、「ゴシュユの古名」としているが、「サンショウの別名」としている辞書もある。和歌では歌語として、「かわはじかみ」は存在しない。茱萸もないに等しい。万葉集を始め、勅撰集の二十一代集に、茱萸という表現は見あたらない。しかし、清少納言の「枕草子」の三十七段にはこのように述べている。

節（せち）は、五月にしく月はなし。（中略）九月九日の菊を、あやしき生絹のきぬにつつみてまゐらせたるを、おなじ柱に結ひつけて月頃ある薬玉にとけかへてぞ棄てつめる。また、薬玉は、菊のをりめであるべきにあらん。（下略）

（節句は、五月にまさる月はないのだ。（昨年の）九月九日重陽の節句に飾った菊を、粗末な生絹の絹に包んで差し上げたのを同じ柱に結びつけた。（それから）数ヶ月経っている、その薬玉の紐を解いて、中の菊と取り替える。また、（今年の五月五日に柱に結びつけた）薬玉は、菊の節句まで柱に結び付けるべきだろうか。）

要するに、五月五日と九月九日には、それぞれ薬玉を柱に結び付ける習慣があった。その薬玉を端午と重陽とで取り替えるようにしていたという。五月五日の薬玉は、沈香など薫りの高い薬材を砕き、小さな丸薬を作り、絹の袋に入れ、菖蒲、蓬を添えたもので、九月九日の薬玉は菊と茱萸が入っているとされている。

では、漢詩の領域はどうだろうか。『懐風藻』には茱萸が登場せず、『凌雲集』が一首、『經國集』が二首のみである。何故「茱萸」は歌われないのか。『日本紀略』寛平九年九月九日の条には、「天皇御紫宸殿、賜重陽宴、観群臣挿茱萸」とある。中国から取り入れた行事を忠実に繰り返していたのが分かる。しかし、一向に歌には登場しない。いったい、茱萸は和歌の素材としてそぐわないと考えられたのだろうか。強烈な香りを持つ茱萸は、和歌の土壌に根を下ろすことは難しかったではないかと想像される。国歌大観[24]を検索してみると、茱萸は僅か三例を見るのみである。まず、『新撰朗詠集』の二四六番歌は次の通りである。

歌　蟋蟀（しつしゅつ）声寒初過雨　しつしゆつこゑさむうしてはじめてあめをすぐ
茱萸（しゅゆ）色浅未経霜　しゆゆいろあさうしていまだしもをへず　九日　白

和歌ではなく、漢詩の句である。『琴後集』の一三九七番は、「題画歌」とあって、その題詞に「茱萸袋のかたかける絵に」とある。

山人のけふのためしのいく薬かけてやちよの秋をちぎらむ

この歌に出る「薬」は、茱萸を意味していると思われるが、茱萸は直接登場しない。『蒙求和歌集』の四九番歌は蒙求の「桓景登高」をもとに詠んだ歌である。茱萸は、蒙求の原文に出ているが、歌には登場しない。

はかなくてふもとのゑひにしづまましし山路のきくのなさけならずは

この三例は、何れも「茱萸（しゅゆ）」を和歌に直接詠んでいない。茱萸は和歌において、歌語として、市民権を得ていないと言えよう。

四　登高

では、「登高」を見よう。

登高は文字通り、高いところに登ることである。その目的は、おおざっぱに言うと、私的な行為である場合は望郷・望遠、公的な場合は国見のためである。国見としての登高は、春秋時代齊景公が最初[25]になる。登高は当初から難を避けるための行為ではない。従って、古い文献に出る登高も九日の行事として詠まれたのではない。『荊楚歳時記』に「正月七日為人日、以七種菜為羹。剪綵為人或鏤金箔為人、以貼屏風、亦戴之頭鬢。又造華勝以相遺。登高賦詩。」とある。頭鬢に戴くと言っているところは、端午の菖蒲や、重陽の茱萸などと類似した行いである。底流となる思想はやはり、邪悪を払い除けるところであろう。中村喬の『中国の年中行事[26]』によると、登高は秋の祭礼の場所が山の上であることに由来するという。高爽の所は浄化作用があり、遠望する行為は、身に降りかかる災厄を未然に防ぐことが出来るとも言っている。

登高が九日に行われた最初の記録は「南齊書」本紀第三に、武帝蹟の記述になる。

九月己丑、詔曰、「九日出商飆館登高宴群臣。」辛卯、車駕幸商飆館。館上所立在孫陵崗、世呼為「九日臺」者也。

（九月己丑の日、詔曰く、「九日、商飆館に出で登高して、群臣を宴に招く。」辛卯日、車で商飆館に行幸する。館が立つところが孫陵崗上であるが、これは後世が「九日臺」と呼んでいるところである。）

西暦五世紀末のことである。九日に登高をしたのは、「桓景登高」の伝説に影響されたのかは定かではない。ちょうど呉均の『續齊諧記』の成立と前後しているので、或いは、文字にされる前に、この物語はすでに「人口皆碑」の状況になっていたかも知れない。『藝文類聚』九月九日に載っている詩文を見ていくと、「九日従宋公戲馬臺」「九日侍宴」「九日玄圃宴」「九日侍皇太子楽遊苑」などのような題が夥し

く並べられている。この日に宴会を開き、詩の唱和などが盛んに行われた事を物語っている。すでに、魏晋南北朝の時代では、九月九日の行事は辟邪とは無関係で、郊遊、宴会の日と化している。これらの詩作は、菊花酒が一例のみで、菊（花）、茱萸、登高の何れも詩に登場しない。九日の詩に、菊（花）、茱萸、登高が詠まれるようになるのは、唐代に入って、公的、私的いずれも重陽の宴会が頻繁に催されてからのことである。と同時に、『続齊諧記』や『荊楚歳時記』などの流布、又は『初学記』、『蒙求』のような基本書に度々陶潜や桓景登高などの記述について触れるようになり、詩作の材が豊かになったものと考えられる。この時代、天子自らもしばしば重陽宴を開催する。徳宗[27]貞元四年にこのような詔令が出ている。

九月丙午、詔、「（上略）今方隅無事、烝庶小康、其正月晦日、三月三日、九月九日三節日、宜任文武百僚選勝地追賞為樂。毎節宰相及常參官共賜錢五百貫文、翰林學士一百貫文（中略）」癸丑、賜百僚宴於曲江亭、仍作重陽賜宴詩六韻賜之。群臣畢和、上品其優劣云々。

（九月丙午の日、詔曰く、「（上略）いま国内は平穏無事であり、政事も安定している。正月晦日、三月三日、九月九日の三つの節日は、（天子より）賞をだし、文武百官に任せて名勝地を選定して、楽しむといい。節日毎に、宰相と常參官はともに五百貫文、翰林學士一百貫文（中略）を賜る。」癸丑の日、曲江亭において、百僚に宴を賜る。六つの韻を賜り、重陽宴の詩を作らせた。群臣は皆（詩の唱和をして）終わったあと、天子がその優劣を品評する云々。）

詩の韻を賜り、群臣全員が詩を詠み、優劣を競うということである。夥しい数の「應制」の詩は、政事に携わる天子までが率先してこの行事を催したことによって残されたものである。「應制」のほかに、「奉和～～」「奉陪某人登某地」のような、いわば「御用」の詩作もまた数多く残されている。これらの詩は、

奉和九日幸臨渭亭登高應制得歡字　　李嶠

令節三秋晩、重陽九日歡。仙杯還泛菊、寶饌且調蘭。
御氣雲霄近、乘高宇宙寬。今朝萬壽引、宜向曲中彈。

傍点の箇所が示す意味のように、美辞麗句を並べたて、天子の恩徳が広くて深いことや、政事が隆盛であることを、褒め讃えている。また、宴会があまり楽しかったので、翌日も続行されることしばしばである。そのため、九月十日は「小重陽」と呼ばれている。李白にはこのような詩を残している。

九月十日即事　　李白

昨日登高罷　　昨日　高きに登りて罷(や)み
今朝更舉觴　　今朝(こんちょう)　更に　觴(さかずき)を挙(あ)ぐ
菊花何太苦　　菊花　何ぞ太(はなは)だ苦しき
遭此兩重陽　　此の両重陽に遭う

一方、私的な、いわば普段着の詩作となると、トーンは一変して、光陰の無常、悲秋、嘆老などになる。この中には、現在なおも我々の心に残る秀作が多く残されている。

九日　　杜甫

去年登高郪縣北、今日重在涪江濱。苦遭白髮不相放、羞見黃花無數新。世亂鬱鬱久為客、路艱悠悠常傍人。酒闌却憶十年事、腸斷驪山清路塵。

杜甫が廣德元年（七六三年）の秋、閬州で詠んだものである。その年、杜甫は秋頃梓州から閬州に行き、冬また梓州に移動する。昨年も今年も異なるところで重陽節を迎え、白髪は増える一方なのに、方々で菊節に逢うのが恥ずかしい。戦乱のためもあって、人に頼りながら、安住の地を求めつつ、大江南北を彷徨する。生涯不遇の杜甫は、節句に当たり、感慨がひとしおである。「腸斷驪山」は言うまでもなく、楊貴妃のことを踏まえている。

前述したように、登高は重陽の日にのみ行われる行為ではないので、重陽日であるなしに関わりなく登高という語は度々詩人の詩に取り上げられる。登高を詠んだ詩で杜甫が千古の絶唱と言われる詩がある。今でも人口に膾炙される。

登高　　杜甫

風急天高猿嘯哀　　風急に天高くして　猿嘯哀し
渚清沙白鳥飛迴　　渚清く沙白くして　鳥飛び迴る
無邊落木蕭蕭下　　無辺の落木　蕭蕭として下り
不盡長江袞袞來　　不尽の長江　滾滾として來る
萬里悲秋常作客　　萬里悲秋　常に客を作り
百年多病獨登臺　　百年多病　独り台に登る
艱難苦恨繁霜鬢　　艱難　苦だ恨む　繁霜の鬢
潦倒新停濁酒杯　　潦倒　新たに停む　濁酒の杯

時代はやや下るが、宋の陸游の詩にも「平生喜登高、醉眼無彊界。北顧極幽并、東望跨海岱。」と詠んでいるものがある。登高が好きだと自ら言っているように、陸游の詩には登高という語がしばしば見受けられる。「登高」が登場する二十三首[28]の詩のうち、九日の作が三首、九月初作が二首のみである。高きに登れば、自然に詩を賦する意欲に駆られるのである。壮大な景色を目前にして、詩人達は詩を詠

まずにいられようか。数は陸游ほどではないが、宋代の詩に登場する登高は、むしろ重陽でない日に詠んだものが多い。前記杜甫の詩が我々に投げかけてきた、個人の悲哀や無力感を越えた荘厳とまで言える悲壮感のすべてを継承している訳ではないが、重陽の「應制」以外の登高の多くは、このような悲愁感に覆われる。詩に「桓景登高」の故事を詠んだとしても、ただ古の伝説に感じた郷愁の表れであろう。

重陽の日には高を登るのほかに、糕（こう）を食べる習慣がある。糕はこな餅で、現代風に、狭義的に言うと、干菓子の落雁のようなものである。孟元老が北宋の都、開封の生活を追憶して著した『東京夢華録』（一一四七年成）に、

九月重陽都下賞菊。有數種、（中略）都人多出郊外登高、如倉王廟四里橋、（中略）前一二日各以粉麪蒸糕遺送

（九月重陽都下みな菊を観賞する。菊は数種類もある、（菊の種名を略）都人の多くは郊外に出て、登高する。場所はたとえば倉王廟四里橋、（中略）など。重陽の一、両日前から、粉麪を蒸して糕を作る。それを人に送ったりするのである。）

とある。南宋呉自牧の著『夢粱録』（一二七四年成）にも、「此日、都人市肆以麪蒸糕（中略）名曰重陽糕。禁中閤分及貴家為饋送」と言っている。つまり、この日には、重陽糕を食べたり、饋送品として使ったりする。なぜ糕を食べるのか、近人蔡利民の著『蘇州民俗』[29]に「この事（桓景登高）が江南水郷にも伝わったが、しかし、この一帯は平原地区のため、高い所などない。ならば、高（こう）と同じ発音の糕（こう）を作って、高きに登る代りに、それを食べることにした。」と言っている。また、「その後、高いところがあるなしに拘わらず、みな糕を食べるようになった」ともいう。実のところは、この糕も歴史が古い。『西京雑記』に既に登場していた蓬餌がその原型であると考えられる。餌について、鄭玄が『周禮・天官・籩人』「羞籩之實、糗餌、粉餈」の注に「皆粉稲米、黍米所為也。合蒸曰餌、餅之曰餈」と言っている。蓬餌はつまり、よもぎの団子である。この蓬餌は、南方に伝わったのち、長い年月を経、食文化の発展に伴い、現在我々もよく知っている「糕餅」の類になったのである。しかし、この「糕」という字はほとんど詩に詠まれない[30]ので、詩語としては成立しない。

では、和歌の舞台では、「登高」はどのように登場しただろうか。二十一代集を検索してみても、登高の用例は見あたらない。勅撰漢

詩集にも詩例が極めて少ない。『凌雲集』には六首の重陽詩がある。すべてが嵯峨天皇が神泉苑において重陽宴を開催した時の作である。その中、

重陽節神泉苑同賦三秋大有年題中取韻尤韻成篇　　作者

旻氣何寥廓、登高望悠悠。大田穫豐稔、從此歳工休。芳萸筵上薦、時菊盞中浮（下略）

という詩がある。茱萸をも織り込んでいる数少ない[31]一例である。

結　語

重陽の風物と端午の風物とは非常に類似している。重陽は菊花をめで、菊花酒を飲み、茱萸を頭か体に付け、連れだって高きに登る。端午は菖蒲を頭に戴き、雄黄酒を顔に塗る。五色の糸で彩った香嚢を体に付け、龍舟の一騎打ちを見物する。本来、重陽の菊は長寿を願い、茱萸、登高は何れも辟邪のためにあった。端午節の雄黄酒、菖蒲、艾などと同じ役目である。重陽の節句に比べ、端午の節句の成立は時代が遅れたわけではないが、端午詩は唐代まであまり詠まれなかった。しかし、行事は時代が下ると共に盛んになり、現代においてもなお最も重要な年中行事として執り行われている。対して、唐代まで詠まれた重陽詩の数は端午詩の十数倍も及んでいるにも拘わらず、現代はその行事が廃れていると言える。日本においても同じ現象が見受けられる。何故こうなったのか。柳田国男氏が「おくんちのこと[32]」という一文に、

（前略）五節句の中でもいわゆる重陽だけは、ことに中国から学んだ式典と、日本民間の古習とが、十分な調和を遂げていなかったように思う。（下略）

と言っている。日本の年中行事の中、中国からの習わしがたくさん入っていることは周知の通りである。長い年月を経て、伝来時の様式を変えつつも、日本の習慣とうまく融合するものだけが残される。三月三日、五月五日、七月七日、今でもそれぞれの行事の中から古の中国を偲ばせるものがたくさんある。対して、九月九日にはそれがない。柳田氏が指摘したように、重陽の行事は日本民間の習慣とうまく調和が取れなかったため、人々の生活には馴染まなかったのであった。一つ新しい行事を取り入れるには、それなりの背景があり、それを受け入れられる素地が必要である。これはやはり信仰と深い関係があると考えられる。つまり、調和が取れないというのは、地方の信仰とうまく融合できないからである。山中裕氏が指摘したように、日本においては、伝来当時から重陽はあくまでも宴会[33]であって、節会ではない。それは、中国において、重陽節は早くも魏晋南北朝時代から信仰の意味合いを失い、日本に伝来する前からすでに楽しい宴遊の会に化していたからであろう。伝来後、平安初、中期に、朝廷、貴族の間では度々重陽宴を催したが、所詮王朝の人々の風流の一端に過ぎず、庶民とはさほど関わりがないと言える。そのため、のちに朝廷はこの宴会を、節会として定めたこともあったが、結局民間の信仰との結びつきが薄く、宴会から脱皮できなかったと思われる。また、詩文の世界では、日本に伝わった重陽の伝説や、行事への受け入れをそのまま詩歌に表していない。やがて、菊に目を奪われ、菊を重陽と関わりなく歌うようになる。日本も中国同様、元々九月は収穫の季節である。秋祭りは、新嘗めをし、豊作を祝い、無病息災を祈念する意味を持っている。信仰の意味を持たない宴会ではやはり節句として、定着し難かったと思われる。ましては、その宴会の中心であるはずの「賞菊」は菊の栽培、品種の改良、開発などの事情により、独り歩きしてしまい、九月九日その日の菊であることの意味が無くなってしまったのである。行事から信仰の意味を抜き取り、菊不在となると、残りは、宴会の形式のみであり、重陽の日へのこだわりが限りなく薄らいでしまうのである。

中国においても、ほぼ同じ原理の働きによって、現代では重陽が往年のにぎやかさを失っている。信仰との融合の問題に加えて、中国には、地域または地理的な要素が入っていると考えられる。端午の節句は政治の中心が南に移動することによって、元々南の地方の民間で盛んだった行事が詩人の共感を呼び、詩文に盛んに詠まれるようになった。重陽の節句は、中原地方の政事を司る人が中心だった宴会が、政治の中心が南移するに従って、登るべき高所がないことや、菊の咲く時期が北方より遅くなることなどの地理・気候の理由で、行

事が重陽の日から分離していったと考えられる。加えて、現代において、太陽暦を採用しているため、歳時の風物と節句のこよみが益々ずれてしまい、この分離もいっそう際立ったと言えよう。無論、中国の場合は、日本と異なり、重陽詩の詩語は、古代より数々の名詩文に登場しており、文学の基本書で度々出会うことによって、現代まで我々の脳裏に深く植え付けている。重陽の日に、菊を観賞したり、茱萸を佩びたりせず、また高きに登らずとも、これらの詩語に触れるたびに、我々は古の風習にしばし思いを馳せ、郷愁を覚えるのであろう。

注

（1）唐代に端午詩が少ない要因に関して、拙稿「端午風物詩語小考」を参照されたい。『藝文研究』第八十七号　二〇〇四年

（2）漢の劉歆の撰という説もある。本論は注1に出る拙稿同様、晋の葛洪の撰とする。

（3）後漢書志第二十二郡國四荊州南陽荊州記曰、「縣北八里有菊水、其源旁悉芳菊、水極甘馨。又中有三十家、不復穿井、仰飲此水、上壽百二十三十、中壽百餘、七十者猶以為夭。（下略）」

（4）晋書孟嘉傳「（上略）後為征西桓溫參軍、溫甚重之。九月九日、溫燕龍山、僚佐畢集。時佐吏並著戎服、有風至、吹嘉帽墮落、嘉不之覺。溫使左右勿言、欲觀其舉止。嘉良久如廁、溫令取還之、命孫盛作文嘲嘉、著嘉坐處。嘉還見、即答之、其文甚美、四坐嗟歎。」

（5）山中裕『平安朝の年中行事』塙書房　塙選書七五　一九七二年　二三八～二四八頁。

（6）『日本書紀』に天武天皇「十四年九月壬子、天皇宴于旧宮安殿之庭、是日皇太子以下至忍壁皇子賜布各有差」とある。

（7）『政事要略』惟宗允亮が崇神天皇の代から寛弘六年の間の年中行事、公務交代、糺弾雑事等を類別集録したもの。百三十巻の大著だったが、現存二十六巻。その巻二十四に九月節会とある。

（8）李白「九日登山」
淵明歸去來、不與世相逐。為無杯中物、遂偶本州牧。
因招白衣人、笑酌黃花菊。我來不得意、虛過重陽時。（下略）

（9）杜甫「九日登梓州城」
客心驚暮序、賓雁下襄州。共賞重陽節、言尋戲馬遊。
湖風秋戍柳、江雨暗山樓。且酌東籬菊、聊祛南國愁。

(10) 白居易「九月八日酬皇甫十見贈」
君方對酒綴詩章、我正持齋坐道場。處處追遊雖不去、時時吟詠亦無妨。
霜蓬舊鬢三分白、露菊新花一半黄。惆悵東籬不同醉、陶家明日是重陽。

(11) 『西京雑記』を参照。

(12) 禁署寒氣遲、孟冬菊初坼。新黄間繁綠、爛若金照碧。仙郎小隱日、心似陶彭澤。秋憐潭上看、日慣籬邊摘。今來此地賞、野意潛自適。
金馬門内花、玉山峰下客。寒芳引清句、吟玩煙景夕。賜酒色偏宜、握蘭香不敵。淒淒百卉死、歲晚冰霜積。唯有此花開、殷勤助君惜。

(13) 宋劉蒙『菊譜』三十余種の銘柄を収録。また、明周履靖の『菊譜』には一二〇余種を収録。このほか、宋成大の『范村菊譜』、明黄省曾の『菊藝書』などがある。

(14) 東坡全集、巻二十三「江月五首」の引言。

(15) 湯浅浩史「菊の行事」『植物と行事』朝日出版社　朝日選書四七八　一九九三年、斎藤正二「菊」『植物と日本文化』八坂書房　一九七九年、武田久吉「菊」『民俗と植物』講談社　講談社学術文庫一四〇七　一九九九年、などを参照。

(16) 『凌雲集』、八一五年成、重陽詩七首収録。『文華秀麗集』、八一七年成、重陽詩二首収録。『經國集』、八二七年成、現存六巻（二〇巻）の中重陽詩一七首収録。

(17) 竹岡正夫『古今和歌集全注釈　上下』　右文書院　昭和五十六年補訂版による。

(18) 「寛平御時菊合」は寛平三年（八九一）頃、当時の宇多天皇の宮廷で催されたもので、現存する最古の菊合である。この菊合は菊花の美を競う純然たる物合であるが、菊に結びつけられた短冊の和歌が文学的対象となった。菊花は左右各一〇本が合わされたので、和歌の数も二〇首となるが、和歌は余興として添えられたものであって、それ自体は合わされていない。

(19) 老去悲秋強自寛、興來今日盡君歡。羞將短髮還吹帽、笑倩旁人為正冠。藍水遠從千澗落、玉山高並兩峰寒。明年此會知誰健、醉把茱萸子細看。

(20) 晋朝太原中都の人、二四〇年?～二九三年。

(21) 『本草綱目』呉茱萸の釋名に、呉の地方の茱萸は上質なので、呉茱萸という名前が出来たという。

(22) ①王昌齢「九日登高」
青山遠近帶皇州、霽景重陽上北樓。雨歇亭皋仙菊潤、霜飛天苑御梨秋。
茱萸插鬢花宜壽、翡翠横釵舞作愁。謾説陶潛籬下醉、何曾得見此風流。
②耿湋「九日」
重陽寒寺滿秋梧、客在南樓顧老夫。歩蹇強登遊藻井、髮稀那更插茱萸。
横空過雨千峰出、大野新霜萬葉枯。更望尊中菊花酒、殷勤能得幾回沽。

③朱放「九日與楊凝崔淑期登江上山會有故不得往因贈之」
欲從攜手登高去、一到門前意已無。那得更將頭上髮、學他年少插茱萸。
④楊衡「九日」
黄菊紫菊傍籬落、摘菊泛酒愛芳新。不堪今日望鄉意、強插茱萸隨衆人。

(23) 古楽府詩である「陌上桑」又の名「艶歌羅敷行」、「日の出東南隅行」がよく知られる。このほか、例えば、王樞の「至烏林村見采桑者聊以贈之」を見ると、采桑とはよく目にする景色のようである。「遥見提筐下、翩妍實端妙。將去復回身、欲語先為笑。閨中初別離、不許覓新知。空結茱萸帶、敢報木蘭枝。」この詩にでる茱萸帶は茱萸錦で出来た帯である。

(24) 『新編国歌大観』編集委員会監修『新編国歌大観CD-ROM版Ver.2』角川書店　二〇〇三年。

(25) 漢の劉向が撰した『説苑』巻八に「齊景公伐宋、至於岐隄之上、登高以望。太息而嘆曰昔我先君桓公云々」とある。

(26) 中村喬『中国の年中行事』平凡社　一九八八年　一九八～一九九頁。

(27) 舊唐書本紀第十三

(28) 臺湾元智大学中国文学網路宋名家詩の検索系統を使用。

(29) 蔡利民『蘇州民俗』蘇州大学出版社　二〇〇〇年　三二七～三三二頁。

(30) 清蕭智漢撰『新増月日紀古』巻九に『聞見録後録』を引いて、劉禹錫（字夢得）が九日詩を作るとき、「糕」を使いたかったが、五経の中にこの文字が見あたらないから、使うことをやめたと記述している。

(31) 注（16）を参照。

(32) 柳田国男「おくんちのこと」『年中行事覚書』講談社　講談社学術文庫一二四　一九七七年　一六五～一六七頁。

(33) 注（5）を参照。